

特 新
別 春

だいせつざんのすがお

大雪山の素顔

今月はお正月の拡大版です。身近な動物、エゾタヌキのお話。人間には分からない生態をたっぷりご紹介いたします。

山すその隠れた愛嬌者、エゾタヌキ

大雪山には多くの種類の動物が生息しています。「見てみたい、出合いたい動物は?」と聞くと、ヒグマ、キタキツネ、エゾシカ、ナキウサギなどという名前が出てくるのではないのでしょうか。

ところが同じ質問を欧米人にしたところ「ラクーン・ドッグを見たい」と言われました。どんな動物のことだと思いますか?

訳すると、ラクーン=アライグマ、ドッグ=犬となり、直訳すると「アライグマ(のような)犬を見たい」となります。その条件に当てはまる動物は、実はタヌキなのです。

野生のタヌキは極東アジアにしかいない動物です。欧米やオーストラリア、アフリカではまず見かけることはありません。東ヨーロッパの一部の地域で狩猟目的のため放され少し増えています。数はそれほど多くないようです。それで欧米人は北海道で見たい動物の候補に挙げようようです。

皆さんの中には、北海道にタヌキはいない、と思われている方もおいでではないのでしょうか。同じイヌ科のキタキツネを圧倒的に多く目にするので、あまり印象に残らないのだと思います。

希少ではない動物のため、動物学者の研究対象にもならず、正確な調査も進んでいません。身近な存在をあまり知らないのではないのでしょうか。

北海道のエゾタヌキは、とても愛嬌(あいきょう)のある表情や体つきをしています。全体は黒茶っぽい毛に覆われて、目の周りにはパンダ模様があります。そして、短足でずんぐりとした体にふさふさの尾もっています。短い足のせいでしょいか「ドタドタ、コソコソ」と歩いているようにみえます。足跡は酔っているようにふらふらとしています。

食べるものはネズミや鳥類などの小動物、昆虫、木の実などですが、走ること、木登り、ジャンプも苦手

なので、地面に落ちた木の実や地中にある幼虫、ミミズなど、季節に一番採れるものを多く食べています。気性はおとなしく、親子や家族が近い範囲に集まって生活します。巣穴は自分で作るのではなくてキツネの古巣や木の穴、岩の隙間などを利用しています。時には古い納屋や土管、はたまた庭先の犬小屋など人工物も使うことがあります。とっさのときには「タヌキ寝入り、(死んだふり)」をして敵をはぐらかします。

地面に餌がなくなり、雪で歩きにくくなる冬は苦手です。寝ぐらに入り込み、秋の間に溜め込んだ皮下脂肪を頼りにして、むやみに動かずにエネルギーを節約しています。止むを得ず出掛ける時には、むき出しの肉球で冷たさと、そして短い足で雪深さと戦って出掛けているのです。

憶病でユーモラスな動きのエゾタヌキですが、実は私たち人間が原因となって問題が起きています。

「ごみ食」によってがんが増加し、ペットから感染する皮膚病が流行し、外来生物のアライグマが野生化して増殖しているため生息域が狭められたり…。彼らの生活域の環境が脅かされ始めているのです。

エゾタヌキの生活域は、大雪山の標高が高い地域というよりも、私たちが生活している山すそです。ですから私たちは、身近な環境を悪化させないように行動することで野生動物を守ることにつなげることが出来るのです。

残念ながら地味で見た目も生活も目立たないエゾタヌキですが、彼らの姿を目にできるように身近な山すその自然に気を配ってみてはいかがでしょうか。

春はエゾタヌキの恋の季節です。活動が活発になりますから、もしかしたら目にすることがあるかもしれませんね。



自然案内人・環境教育フリーランス 鳥羽晃一



「2010年世界農林業センサス」にご協力ください



平成22年2月1日現在で、全国一斉に「農林業の国勢調査」といわれる「2010年世界農林業センサス」が実施されます。

今後の農林業政策に役立てるため5年ごとに実施している極めて大切な調査です。農林業を営んでい

る皆さまのところに1月中旬から調査員が訪問し、農林業の経営状況などの調査票記入をお願いする予定です。ご協力をお願いします。

お問い合わせ：地域活性課 ☎82-2111 (内線261)